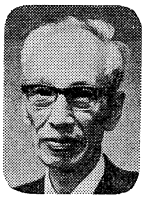
第50号　50円
昭和52年9月25日

内　容

創刊50号に寄せて…… 1
国際館と交友館いよいよ着工…… 2
国際プログラム委員会発足…… 3
昭和52年度共同セミナー委員会… 4
昭和51年度収支決算書…… 4
第14回大学教員懇談会…… 7
第92回大学共同セミナー…… 8
遠来荘に松月池の記念碑を…… 9
館長日記から……11
事業部だより…10　利用状況…11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
〈所在地〉
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話 0426-76-8511～3
振替口座 東京 74590番
〈東京事務所〉
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京 (241) 3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版



創刊50号に寄せて

日本学士院会員・当ハウス顧問
山内恭彦

ときおり郵便物にまじって配達されるセミナー・ハウスのニュースは、楽しい読物であるが、いつの間にか50号が刊行されることになった。十余年間のハウスの歩んだ道を振り返って、今更感慨に堪えない。

たかがB5判一〇ページばかりの印刷物であるが、このニュースが大学セミナー・ハウスの存在を不断に世に示してきた功績は大いに評価されてよい。このニュースには、当然会館の事業、管理、経営、会計などの事業関係の、ともすれば無味乾燥な記事も含まれているが、これらは必要最小限度に、しかも注目すべき新企画、財政の健全さなど、誰にも気になる点だけを多少のコンマーシャルをも含めて巧みに編集してある。

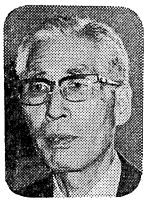
しかし、なんといっても、ニュースの中で一番注目を引くのは、共同セミナーに関する記事である。しばしばその第一ページを飾る全体講義の要約、参加した先生や学生の感想など、とりどりに注目を引く。ただ、無条件賛美が多過ぎるのは、やや気になる。もっと率直に、不満や注文が述べられた方が、将来の参考として役立つのではなかろうか。

この共同セミナーの題目を見返してみると、経済の高度成長が挫折し、国民が目標を失って混迷時代にはいった十余年間、学問、文化、思潮、社会の中心問題が振れ動いた様子がまざまざとうかがわれる。昭和後期の思想史の一つの材料としても役立ちそうである。

それにしても、この共同セミナーは、これによって当会館の目的の一つであるインター・ユニバーシチの理想を達成する大きな手だてになっているのだから、企画の充実と共に、各大学からの参与がますます盛んになることを期待して止まない。

館長の日記は、飯田さんの剛直な、そのくせ人なつこい風貌をうかがえる、飾り気のない書き振りが好感がもてる。それにして、次から次へ新しい構想を打ち出して、ハウスの面目を日に日に新たにして行く彼のバイタリチには驚嘆の外はない。このセミナー・ハウスを模倣した亜流施設があちこちに作られているようだが、とてもこのアイディアの続出には追従しがたいであろう。

最後に私からの注文。日本も戦後の高度成長に乗った暴走から低成長への転換をせまられている。これに応じて、学生生活にも、もう少し心のゆとりがほしい。といって、ドンチャン騒ぎも困る。精神的な生活の楽しみ、心の豊かさの涵養、こんなことをハウスでも考え、試みてはどうだろう。



50号とは……感深し
—理念と現実を架橋する—

館長　飯田宗一郎

昭和40年1月25日に創刊したこの「セミナー・ハウス」は、本号をもって50号になる。蠟山政道先生にお書きいただいた「大学セミナー・ハウスに期待するもの」と題する巻頭論文をもって、創刊号を世に送ってから、早くも一三年が過ぎた。

内容は、毎号高い理念をかかげた抽象的な論文をのせる一方では体験者でなければ書けない実証的な論文と真実の報道的記事が大部分である。従って誇張した表現を許していただくならば、週刊誌や新聞にのっているような保存のきかない記事は一つもない筈である。さらに国公私立大学や学会の利用状況、人間の善意から生まれた千人会の申込状況、財界の支援によって展開される募金状況、健全清潔を旨とする法人の運営状況、そして協力会員校の会費と文部省の補助金による公的な財政状況が克明に報告されている。かくの如く一三歳にして、本紙の性格はほぼ出来上ったといってよい。

本紙の名付親は当時の企画委員長手塚富雄東大教授である。「セミナー通信」とか「大学と人間」とか「出会いの丘」といわずに、施設の名称をとって、ずばり「セミナー・ハウス」と命名したのである。当時としては、セミナー・ハウスということばは新語であり、日本で唯一の施設であった。さらに本紙のニュース的役割を表示する必要から、英語名を「Seminar House News」としたわけである。

館長日記は、私の思考と行動の様式を、個人的な偏見をさけながら客観的事実を通して記録的に記述したものである。毎号、老壮若にわたる恩人、知人、友人に近況をお知らせするようなつもりで書いている友情の私信でもある。

終りに千人会で印刷費を負担していただくことが、本紙を健全に育て、発行させて下さる所以であることを申上げ、改めて感謝したい。

国際セミナー館と交友館
いよいよ着工のはこび
6月23日に地鎮祭を挙行

開館十二年目にして、更に二つの施設が姿をあらわすことになった。

昭和50年11月1日開館十周年を祝い、ここ多摩の丘に歓喜の讃歌が充満したとき、大学生を愛し、真理を愛する「心」が、十周年記念事業として更に「二つの施設」の建築を計画させるに至ったのである。

既設「大学院セミナー館」の建築をふくめて、開館十周年を記念する募金は、三億円を目標として今日もなお継続されているが、補助金と財界の寄付金が順調に進み、目標達成にこぎつけることができそうである。今回地鎮祭を行い着工したのは国際プログラムの拡充と、学会や国際会議等年々増加する要望に応えるための宿泊研修棟「国際セミナー館」と、教授や学生たちがセミナーの疲れをいやすためのスナックを付設したコモン・ルームとサロンをかねた小ホール「交友館」である。どちらも本年度中に完成の予定である。

地鎮祭風景——理事長川喜田愛郎氏

小雨そぼふる6月23日(木)午前11時、川喜田理事長、飯田館長、関係職員、設計担当者・U研究室の吉阪、松崎、岡村の三氏、施工者・清水建設国分常務ほか関係者、計40名が参集して、サービス・センター屋上と長期セミナー館屋上において神式による祭典を行った。

式後、食堂において、なおらいの祝宴を張り、一同工事の無事を祈って散会した。

◇

再三、本紙上に建築の予告をした「国際セミナー館」と「交友館」はどんな建物かを紹介し、完成後どのように活用したらよいか、今からお考えいただくことにしたい。

◎国際セミナー館

外国人学生及び研究者のための公称・国際交流オリエンテーション・センターとしての事業を行うのであるが、建物の名称は、既存の建物のように統一する必要から、別記国際プログラム委員会において「国際セミナー館」と命名した。「大学院セミナー館」ともども、当ハウス開館十周年記念事業の双璧となる。

現在の長期セミナー館の宿泊棟と大セミナー室に連結して建てられる30人収容の宿泊施設であり、これによって長期セミナー館とあわせて、55人の収容力を持つことになる。

傾斜が利用されるので、入口は二階になる。二階には、54㎡の玄関ポーチがあり、すぐ事務室と談話室、図書室がある。学会や国際会議の事務局に用いられる。このフロアに宿泊室が七室、浴室ができる。

一階は、宿泊室六室の外、セミナー室一室（64㎡）、洗濯室、管理室、地階にセミナー室が三室できる。

従来、セミナー室や浴室の不足を痛感しているが、これらの問題も改善されよう。外国人の宿泊にも、長期の滞在にも快適に過せるように配慮されており、諸施設の中でも最も生活条件のよい宿泊棟となるはずである。

【建築の概要】
構造＝鉄筋コンクリート造、地下一階、地上二階、冷暖房設備付
床面積＝八一八・〇五四㎡
設計＝U研究室
施工＝清水建設株式会社
総工費＝一億二、四四〇万円

◎交友館

現在のサービス・センター屋上に建てられる。倉庫は別として、間仕切りなしのホールで、一角にセルフ・サービスの調理台が備えられる。この交友館の使用方法として考えられるのは、ゼミナールの休憩、懇談、コンパ、新利用者のためのオリエンテーション、学会や研究会のティー・パーティ、グループ相互の交流、合唱や演奏を伴う諸集会、夜間はアルコールを解禁するから、スナックに使用する。

また、中央庭園と併用できるので、野外パーティや、バーベキューなどにも好適の場所となろう。

【建築の概要】
構造＝鉄筋コンクリート造、地上一階、冷暖房設備付
床面積＝一七〇・〇六九㎡
総工費＝三、二〇〇万円
設計施工＝国際セミナー館に同じ。

杉野女子大学
52番目の協力会員校に

別記、田村皖司教授をはじめ、よく当ハウスを利用されていた杉野女子大学が、7月1日付をもって協力会員校に加入した。

これで会員校は五二大学となったわけで、当法人の基盤が一層強化されたことになる。

施設面の改善すすむ
——より快適な滞在のために

当ハウスは、苦しい経常会計の中から、常に、宿泊利用者が快適にゼミを行えるように心がけている。昭和52年度に入って順次改修工事に着手し、現在までに完了したのは次のとおりである。改修、備品買い換え等に要した経費は約八七五万円である。

◎改修工事（五三六万円）
一、外灯三基設置工事
二、中央セミナー館モーター取替工事
三、図書館・和室、温水機取付工事
四、オイル・バーナー清掃補修工事
五、ポンプ分解整備工事
六、蒸気主管保温工事
七、暖房配管補修工事
八、長期研修館床面塗装工事
九、ブリッジ塗装工事

◎購入（二五三万円）
一、第三群～七群マットレス一四〇枚、ベッドスプレット二一六枚
二、シーツ、机カバー、毛布カバー各一〇〇枚、ユニットハウス用スリッパ二〇〇足

◎造園（八六万円）
一、遠来荘造園工事（つくばい、第三次庭園造園、池周辺石組工事、電気配線工事他）

国際プログラム委員会発足

第一回委員会を開催

7月7日
私学会館

国際化時代における大学セミナー・ハウスの役割は、当然国際理解と、国際交流等の国際教育の開発へと向けられる。すでに、過去四回に及ぶ国際学生セミナー、外国大学の日本研究グループや国際学生会議の受入れ、長期語学研修への協力等の経験をもつ当ハウスが時代の要請に応えるべく「国際プログラム委員会」を創設するに至ったのは故なしとしない。

館長の委嘱をうけて、こころよくご就任下さった委員各位は、別記の通りであるが、このような立派な委員会が組織された背後には、セミナー・ハウス十年の歴史があることを見落してはならない。

7月7日(木)私学会館において開かれた第一回委員会には、海外旅行中の二名の委員を除く一四名が出席された。

まず、委員長に上智大川田侃教授、副委員長に中嶋嶺雄東京外語大教授、広野良吉成蹊大教授を委嘱した。ついで、国際プログラム委員会内規を検討、国際学生セミナーを中心とした別記のプログラムについて種々協議が行われた結果、国際学生セミナー運営委員として、広野（委員長）、池田、鈴木、平野、山代各委員を、また、来日する外国人学者を囲むシンポジウムを企画実施する運営委員として、中嶋（委員長）、東、三輪、横田各委員を委嘱した。

この委員会の活動によって、国際プログラムが、内容的にも一層充実したものとなり、今、建築中の「国際セミナー館」が、内外大学関係者のために、大いに活用されることを期待したい。

国際プログラム委員

〈委員長〉上智大学教授　川田　侃
〈副委員長〉
東京外国語大学教授　中嶋嶺雄
成蹊大学教授　広野良吉
〈委員〉
お茶の水女子大学助教授　池田摩耶子
早稲田大学教授　示村悦二郎
慶応義塾大学教授　鈴木孝夫
東京工業大学助教授　原　芳男
津田塾大学教授　東寿太郎
東京大学助教授　平野健一郎
上智大学教授　三輪公忠
国際基督教大学準教授　横田洋三
早稲田大学外事課長　山代昌希
日本学術振興会人物交流課長　阿部美哉
国際交流基金受入課長　池谷貞夫
文部省学術課長　植木　浩
評論家　金山宣夫

＊　＊

なお、今年度は、国際セミナー館建築を前にした準備期間としていわば小手調べのつもりで次のようなプログラムを計画している。

（一）国際学生セミナー

過去四回に亘って実施した経験の上に立って、今年度は対象をアジアに限定せず、欧米にも共通な諸問題を取りあげ、世界史的背景から日本および日本人を見なおす機会としたい。従って参加者も範囲を広げ、テーマを「文化接触と日本」（仮題）とし、スケールは内外学生を一〇〇名、二泊三日、12月に実施の予定である。

（二）国際交流内外人学者シンポジウム

来日する外国人学者を囲む大学教授・文化人によるシンポジウムで、人数は十数名に限る。一泊二日の予定。

（三）国際交流学生集会

日本人学生に国際的視野で外国人に接する機会を与え、また在日留学生の日本人観の改善に資するため、随時、在日留学生を招き、当ハウス利用の各大学ゼミ学生と交流せしめる。

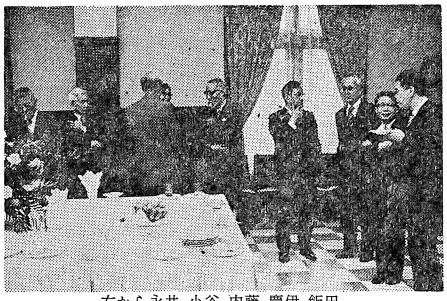
（四）日本研究講座を持つ外国大学の滞日学習への協力

コルゲート大学、ルイス・アンド・クラーク大学、アリゾナ大学等の日本研究グループは、昭和49年頃までは、毎年、三～六週間、当ハウスに滞在して夏季コースを開設したが、日本の生活費の高騰によりその後中断している。比較的低廉かつ学習に適する生活環境を整え、日本研究の来日を促進する。

前文部大臣永井道雄氏と新理事長川喜田愛郎氏のために

慰労と歓迎のティー・パーティを開く

6月9日
銀行クラブ



右から永井，小谷，内藤，慶伊，飯田，村山，山内，川喜田，朱牟田の諸氏

永井道雄氏が民間大臣として文部行政に手腕を振われたことは周知のことであるが、当ハウスは同氏の文部大臣ご在任中のご苦労に謝することを計画していたが、今日に至ってしまった。

一方において、新しく理事長になられた川喜田愛郎氏の就任披露を行う必要もあって、ティー・パーティが企画された。

6月9日、丸の内の銀行クラブを会場に、当ハウスとご縁の深い理事、評議員、顧問、共同セミナー委員等、限られた親しい人々が招待された。

会は、元理事長加藤六美氏の乾杯によって開始された。

永井道雄氏は挨拶の中で、「セミナー・ハウスが、飯田館長を中心に創設され、今日までの輝かしい歩みを続けてきたことは、日本の教育界における画期的なことで、私は、飯田先生のご熱意にほだされてお手伝いしたにすぎません」と強調され、また、新たに理事長の重責を荷われた川喜田愛郎氏は、「このたび、茅先生始め、長老の先生方のご推挙とご懇請をうけ、理事長の重責をお受けすることになりましたが、ここにご出席の方々のご協力を期待する」と挨拶され、飯田館長の司会でなごやかな歓談のひとときを過ごした。

国公私立の学長、教授と学界の長老、それに文部省の高官が参会され、大学セミナー・ハウスの支持層の広さがうかがわれた。主なる出席者は次のとおりである。

森戸辰男、茅誠司、小川芳男、山内恭彦、増田四郎、加藤六美、林健太郎、福原満洲雄、沼田稲次郎、村山松雄、平島正喜、岡茂雄、小谷正雄、渡辺輝雄、相良惟一、鈴木隆雄、川原栄峰、鈴木皇、内藤正、板垣與一、井内慶次郎、井早康正、遠藤真二、岡宏子、尾形憲、甲藤好郎、川名明、木田宏、慶伊富長、朱牟田夏雄、示村悦二郎、原芳男、宮崎繁樹、山岸健

（敬称略・順不同）

昭和52年度 共同セミナー委員会が発足

新陣容なる

第一回共同セミナー委員会
52年7月8日／17時半～20時半／私学会館

本年度は、新たに8名を委員に委嘱し、別記のように在任の委員11名、再任の委員5名を加えた24名をもって委員会を組織することとなった。

第一回委員会は、新旧委員の歓送迎会を兼ね、17名の出席の下に開催された。議事は、まず委員の自己紹介のあと、正副委員長の選出が行われた。委員長には昨年に引き続き岡宏子聖心女子大教授が全員一致で選出され、岡委員長より、昨年の副委員長・関口晃都立大教授と、3年間副委員長をつとめられこのたび委員を退任された宇野重昭成蹊大教授の後任として新たに野田春彦東大教授が指名され、全員の賛成を得て承認された。

次に、第90～92回共同セミナーの実施報告が行われたが、第91回「ロビンソン・クルーソーと現代」については、セミナーを取材した記事が掲載されている朝日ジャーナル（7月15日号）が、この日にタイミングよく発売されたため、企画・運営に当たった山岸健委員より実物を紹介しながら報告がなされた。

続いて、第93・94回共同セミナーの準備経過報告のあと、本年度文部省補助金の概要と実施回数の見込について企画室より説明が行われ、前半の議事を終了した。

会食に当たって、6年間にわたり委員として奉仕された宇野重昭教授に感謝の拍手が贈られた。

後半は、本会議の主要議題である12月と1月に開催予定の第95・96回共同セミナーの企画について活発な議論が展開され、次のように大要を決定した。

○第95回（昭和52年12月2～4日）
「現代哲学の潮流（仮題）」

○第96回（昭和53年1月13～15日）
「卒業記念セミナー　日本経済の周辺（仮題）」

なお、来年度に迎える第一〇〇回共同セミナーの構想、大学院セミナーの運営委員会のあり方などをめぐって、種々、意見の交換がなされた。

共同セミナー委員

〈委員長〉
聖心女子大学教授　岡　宏子

〈副委員長〉
東京都立大学教授　関口　晃
東京大学教授　野田春彦

〈委員〉
東京大学助教授　村上陽一郎
学習院大学教授　江沢　洋
成城大学教授　野口武徳
日本女子大学教授　青木生子
東京経済大学教授　荒川幾男
東京大学教授　石井紫郎
国際基督教大学教授　勝見允行
東洋大学教授　坂口順治
日本大学教授　瀬在良男
東京工業大学助教授　谷口汎邦
法政大学教授　時永　淑
青山学院大学教授　原　豊
慶応義塾大学教授　山岸　健
明治大学教授　池上秋彦
成蹊大学教授　黒田道雄
中央大学教授　佐竹　寛
お茶の水女子大教授　外山滋比古
共立女子大学教授　友部　直
上智大学教授　人見　宏
津田塾大学教授　藤村瞬一
早稲田大学教授　村田勝彦
（就任順・五〇音順）

予　告

▲第94回大学共同セミナー▼
主題＝自然科学とキリスト教
期日＝昭和52年11月11～13日

《全体講義》
法政大学教授　山崎正一氏
浜松医科大学長　吉利　和氏

《セクション演習》
A　科学の真理とキリスト教の真理　柿内賢信氏
B　科学的認識と宗教的信知　八木誠一氏
C　近代科学技術とキリスト教の功罪　村上陽一郎氏
D　精神医学とキリスト教　荻野恒一氏

昭和51年度総括収支決算書

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
財産収入	590,000	(1)一般経費	
寄付金収入	2,624,510	人件費	71,175,945
会費収入	27,200,000	事務費	8,481,717
協力会員校会費	27,200,000	法人諸費	1,293,042
事業収入	79,705,007	土地建物費	13,833,455
宿舎収入	65,685,395	事業費	36,033,160
施設収入	10,699,460	一般事業費	7,538,428
食堂収入	3,320,152	普通セミナー事業費	19,241,887
補助金収入	9,010,000	学生指導セミナー事業費	9,252,845
国庫補助金	9,010,000	計	130,817,319
セミナー会費収入	4,067,000	(収支差額)	(△153,049)
学生指導セミナー	4,067,000	(2)特別経費	
千人会補助	3,661,845	固定資産減価償却費	19,656,536
雑収入	3,805,908	固定資産除却費	662,553
		計	20,319,089
		支出合計(1)＋(2)	151,136,408
		当期剰余金	△20,472,138
合計	130,664,270	合計	130,664,270

昭和52年度総括収支予算書

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
財産収入	1,200,000	人件費	74,870,000
寄付金収入	5,700,000	役員報酬	10,050,000
会費収入	27,500,000	俸給	32,690,000
協力会員校会費	27,500,000	諸手当	20,090,000
事業収入	96,310,000	臨時傭上	2,400,000
宿舎収入	70,280,000	福利厚生費	4,000,000
施設収入	18,830,000	旅費交通費	1,200,000
食堂収入	7,200,000	退職手当引当金繰入	4,440,000
補助金収入	12,380,000	事務費	10,210,000
国庫補助金	10,380,000	法人諸費	1,690,000
万博補助金	2,000,000	土地建物費	17,410,000
セミナー会費収入	5,800,000	事業費	49,060,000
学生指導セミナー	5,200,000	一般事業費	7,500,000
国際セミナー	600,000	普通セミナー事業費	23,570,000
千人会補助	7,400,000	学生指導セミナー事業費	13,220,000
雑収入	1,950,000	国際セミナー事業費	4,770,000
		予備費	5,000,000
合計	158,240,000	合計	158,240,000

◈寄付金報告

52年7月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

＜一般寄付金＞

六、〇〇〇円　新生活運動協会　新任担当者研修会殿
一〇、〇〇〇円　多摩設計コンサルタント　鈴木　健殿
一〇、〇〇〇円　大学セミナー・ハウス　食堂社長　酢屋善元殿
五、〇〇〇円　日本ワイルド協会殿
五、〇〇〇円　当ハウス職員　前畑直満殿
六、一〇〇円　第14回大学教員懇談会　世話人　神馬　敬殿　高橋　健殿　示村悦二郎殿
三、九二〇円　中央大学教授　外間　寛殿
三、〇〇〇円　国立教会聖歌隊殿

＜植樹寄付＞

一〇、〇〇〇円　成蹊大学三沢ゼミナール四年生一同殿
三〇、〇〇〇円　芝浦工業大学　建築学科殿
一〇、〇〇〇円　鶴見大学　井村ゼミナール殿
一〇、〇〇〇円　相模女子大学茶道部殿

＜指定寄付金＞

五〇、〇〇〇円　遠来荘松月池記念碑建設費のために　松月会社中殿

＜特別寄付金＞火事見舞金

三、〇〇〇円　東京大学博士課程　申　熙錫殿

＜館長喜寿祝準備基金＞

九、八一九円　第91回共同セミナー参加者一同殿
三〇、〇〇〇円　第91回共同セミナー指導教授　東京都立大学助教授　小池　滋殿
慶応義塾大学教授　松浦　保殿
慶応義塾大助教授　近森　正殿
東京医科歯科大学教授　竹下敬次殿
千葉工業大学教授　鳥居鉄也殿
慶応義塾大学教授　山岸　健殿
三、〇〇〇円　八大学合同セミナー指導教授　成蹊大学教授　宇野重昭殿
一橋大学教授　細谷千博殿
慶応義塾大学教授　池井　優殿
一橋大学講師　南　義清殿
一〇、〇五〇円　八大学合同セミナー参加学生一同殿
一、〇〇〇円　八大学合同セミナー助手　中村　恵殿
一五、七七〇円　第92回共同セミナー参加者一同殿
五、〇〇〇円　当ハウス職員　前畑直満殿

＜現物寄付＞

ざるそばセット一〇組　セイユウセンターデューク　大沢美子殿
有田焼飯茶碗一個、有田焼大皿一枚、焼もの中皿四枚・小鉢三個、煎茶用茶碗二個、花瓶（金属製）二個、すだれ五本、菓子取箸一組　茶道教授　柴田菊代殿
六曲屏風一双（二組）　室内インテリヤ業　杉野一也殿

ニュース創刊のころ

梅　醇（中央公論事業出版取締役）

大学セミナー・ハウスと私の会社の出会いは、昭和37年7月25日、飯田宗一郎先生が『大学と人間』発行の打合せに来社されたのに始まる。たしか蠟山政道先生のご紹介によるものと記憶する。8月から製作に入り9月17日に納本されている。

この時、「セミナーハウス」か「セミナー・ハウス」どちらにするかでちょっとしたいきさつがあったのが妙に印象に残っている。

それから二年余りたった39年11月16日、飯田先生から電話があり、報告書のようなものを新聞形式で出したいということで、即日日本橋本町の事務所にお伺いした。この時、初めて大学セミナー・ハウスの具体的な輪郭をお聞きし、その雄大な構想に驚嘆したものである。

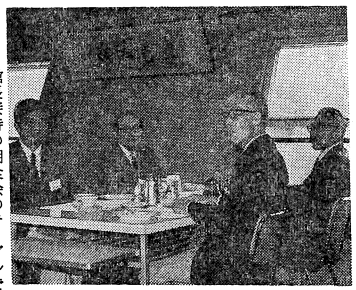
原稿が実際に入ったのは12月も半ば過ぎていたと思う。初めての企画なので、原稿の割付、校正に時間を取られ、1月25日発行が2月6日になってやっと納入できた。創刊号なので一つの型を作らなければならず、手間がかかったのである。たとえば題字一つにしても、甲論乙駁、結局簡単なのが飽きがこなくてよいということで、黒地に文字白抜きの今のものに落ち着いたのである。

編集は最初のうちずっと飯田先生一人でやっておられたようである。原稿を拝見すると、毎号先生独特の風格のある文字でマス目が埋まっており、募金に会合に打合せにと連日いとまのない身でよくも勤まるものだと驚嘆したものである。ある日、原稿を頂きにあがってお昼になり、近所でおいしいカレー・ライスをごちそうになったのも思い出の一つである。

最初の出会いから一五年、ニュースとお付合いするようになってから一三年、創刊号当時の大学セミナー・ハウスのことを考えると今昔の感に堪えない。

▽開館十周年記念事業寄付金＝第三報＝（52年6～7月）

五、〇〇〇円　上智大学教授　高野雄一殿
五、〇〇〇円　東京大学教授　内田久司殿
五、〇〇〇円　龍谷大学教授　高林秀雄殿
五、〇〇〇円　防衛庁参事官　大塚博比古殿
五、〇〇〇円　東京外国語大学教授　斎藤恵彦殿
五、〇〇〇円　国際基督教大学準教授　横田洋三殿
一〇、〇〇〇円　国際基督教大学教授　都留春夫殿
一〇、〇〇〇円　茶道教授　矢内喜久子殿



館長接待の朝食会のテーブルで

左から吉川プリンストン大学教授，伏見日本学術会議副会長，館長，鳴海広島大学教授

予　告

▲第95回大学共同セミナー▼

主題＝理性と想像力

―現代哲学の中心問題―

期日＝昭和52年12月2～4日

≪指導教授≫

中村雄二郎、木田元、生松敬三、市川浩、坂部恵、荒川幾男（運営委員）の諸氏（交渉中）

千人会＝会員増加運動　第10報＝昭和52年6～7月

◇現在会員は一、四五一名です

大学人＝一、一三〇名
社会人＝　三二一名
（52年7月31日現在）

♥入会のこころ

技術連盟のG・L・Cで御地にお世話になること本年にて一〇回となりましたので、この際、千人会へ加わらせて頂きたいと存じます。　法政大学教授　横山勝信

×　×

セミナー・ハウスで楽しい時と新しい友人を得ました。このようなチャンスが大勢の人に訪れますように、そしてまた、セミナーに参加出来ることを願って入会します。
東京卸売センター　大籠まりこ

×　×

在学中、一度しか行きませんでしたが、大変深い印象を受けました。もっと早く気がついていたらよかったと思っています。現在、院試をめざしていますが、いつかまた行きたいと思っています。自分が長い間、セミナー・ハウスの存在と活動を知らずに過ごしたことを思うにつけ、一人でも多くの人がセミナー・ハウスを利用することを願ってやみません。
東京大学52年卒　水谷真智子

千人会の名称の由来――八王子の千人同心は歴史的には有名なものです。一旦緩急の場合は江戸へ、そして日光東照宮へと移動したと言われています。当時、千人もの集団は大変なものであったでしょう。現代、再び学問上の千人同志が八王子にあるということは意義深いものと思います。
計測自動制御学会主事補　猪瀬尚志

×　×

地元に住んでいますので、少しでもお役に立てば幸いと存じます。
早稲田大学助教授　米村貞蔵

◇新しく会員となられた方々

24名〔第39回報告（申込順）〕

C　㈱ハガネ建築設計事務所　松本健次郎殿
C　当ハウス職員　上田　司殿
C　当ハウス職員　清水義久殿
C　埼玉大学助教授　山本　茂殿
B　横浜国立大学学生部長　山崎邦彦殿
C　小金井高校教師　柴田欣一殿
C　電波研究所　宮田ひさゑ殿
C　習字教授　森田悌三殿
C　室内インテリヤ　杉野一也殿
C　農業　堀田次信殿
C　計測自動制御学会主事補　猪瀬尚志殿
C　東京医科歯科大学厚生課主任　小川利子殿
B　東京都立大教授　前島郁雄殿
C　青葉学園短期大学教授　吉田美穂子殿
C　東京都立大助教授　慶谷寿信殿
B　立教大学教授　前田　愛殿
C　筑波大学教授　司馬正次殿
B　早稲田大助教授　米村貞蔵殿
A　富士銀行会長　佐々木邦彦殿
C　国際基督教大学教授　絹川正吉殿
C　石川島播磨重工勤務　内海正志殿
C　法政大学教授　横山勝信殿
C　電気通信大学長　平島正喜殿
C　司法修習生　道本幸伸殿

♥千人会会員からのたより

51回目の誕生記念日です。もう半世紀くらい生きたいものですが、どうですか。それより、食糧やエネルギーの危機が予想される数十年後にたくましく生き抜ける世代を、今の教育がはぐくめるかを心配しています。
九州大学教授　中島直忠

×　×

自分の誕生日を忘れて飛び回っていました。ありがとうございました。

冷えた茶のいとうまきかな
遅くまで教育論を交わしたる夜
東京工業大学教授　米武国弘

◇会費ありがとうございます

昭和52年6～7月（敬称略）

柴田菊代、千野熊男、田中未来、山崎邦彦、一楽信雄、市川節子、杉野一也、猪瀬尚志、堀田次信、森田悌三、宮田ひさゑ、柴田欣一、上田司、清水義久、北郁子、芳野赳夫、斉藤恵彦、徳末愛子、冨山芳正、道喜美代、望月継治、伏見康治、松井源吾、佐藤弦、藤井耕一、和田英一、竹内喜夫、上野芳夫、秀村欣二、宅間宏、前田護郎、澤島侑子、柴田恭二、松平文朗、川田侃、青木郁朗、朱牟田夏雄、鳥海俊宏、名東孝二、林泰造、合田周平、福富啓泰、飯田憲治、太田秀通、坂野正高、臼井久和、西嶋定生、吉田幸弘、藤野登、辻達也、市井三郎、椿弘次、大野泰雄、岡田正弘、池宮英才、佐藤進、荒井基、江沢洋、福山直美、松尾浩也、石川信男、佐藤進、石井修二、荒川有史、柳田博明、早川和男、山本幹夫、慶谷淑夫、西川治、京極純一、古畑和孝、野間三郎、鳥山英雄、小倉充夫、岩橋宣隆、岡本栄一、中村幸安、北野美枝子、佐竹寛、篠原泰三、沢崎守孝、嶺哲之助、林邦夫、川島順平、笠松章、笹森健、水谷松子、金子晃、片岡清子、小畠守生、川喜田二郎、栗林恒雄、小川利子、中村哲哉、滋賀秀三、高山旭、厚東偉介、浅野明子、満田郁夫、吉松藤子、鈴木二郎、犬井鉄郎、川田雄一、荒井良雄、永井裕、讃岐和家、土方保、内山尚三、林俊一、黒田成俊、前田愛、栗原尚子、山西貞、司馬正次、海野優、和田義信、山代昌希、三和治、鈴木務、佐藤誠三郎、小松茂夫、出淵博、野田一夫、浅川淳、黒田道雄、柴田政利、田村皖司、山本尚志、三橋文雄、岡宏子、大頭仁、菊地昌典、土田美芳、簗田長世、金丸重嶺、野見山不二、中村進、柏木恵子、申熙錫、古本捷治、中川一朗、関野昭一、松原治郎、宮川俊彦、福田歓一、鴨澤巌、高島善哉、磯部力、石川馨、三浦徳弘、北村甫、高橋勇悦、尾崎茂、岡沢憲芙、藤平重雄、田島恵治、梅沢豊、奥田夏子、後藤光一郎、藤岡通夫、藤原鎮男、芥川龍男、島薗安雄、川合隆男、長浜洋一、望月一憲、高橋公雄、詫摩武俊、布施濤雄、谷清、平島正喜、中島文夫、矢部章彦、平出彦仁、中山昌、米地実、小池滋、米村貞蔵、吉田美穂子、中川作一、太田善麿、松崎義徳、小島蓉子

千人会収支決算書（自昭和51年4月1日　至昭和52年3月31日）

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
前期繰越金	900,430	事務費	1,295,325
会費収入	5,780,360	印刷費	(442,880)
銀行利息	10,190	通信費	(782,340)
		振替貯金手数料	(70,105)
		学生指導セミナー補助	1,275,845
		ニュース印刷費補助	1,886,000
		広報印刷費補助	500,000
		計	4,957,170
		次期繰越金	1,733,810
合計	6,690,980	合計	6,690,980

第14回大学教員懇談会

主題――学歴社会と大学

――能力が生かされる社会を求めて――

期日――昭和52年7月5・6日

《発題者》

(1)教育と能力―産業界の立場から
東京商工会議所元労働委員会委員長　吉田要三氏

(2)学歴と職業
名古屋大学助教授　潮木守一氏

(3)国家公務員の任用制度及び実態
―採用試験を中心として―
人事院任用局長　今村久明氏

(4)労働省からみた大学卒業者の就職問題
労働省職業安定局業務指導課長　田淵孝輔氏

(5)筑波大学プロフェッショナル・スクールを事例として
筑波大学教授　司馬正次氏

(6)動いている大学改革
前文部大臣　永井道雄氏

(7)『学歴社会調査報告書』について
日本青少年研究所長　千保　保氏

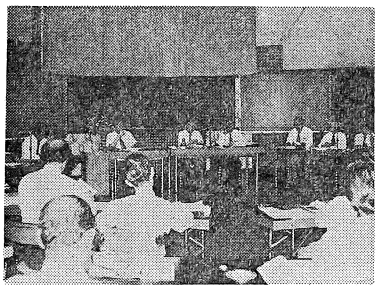
(8)高等教育と専修学校
読売新聞論説委員　加藤地三氏

(9)『揺れる学歴』を取材して
毎日新聞社会部記者　矢倉久泰氏

《世話人》

立教大学教授　宮川宗弘氏（代表）
武蔵大学教授　伊能　敬氏
東京工業大学教授　神馬　敬氏
東京大学教授　甲藤好郎氏
法政大学教授　尾形　憲氏
早稲田大学教授　示村悦二郎氏
東京農工大学教授　高橋　健氏

《参加者》56名（うち女子3名）
ICU、東京理科大、武蔵大、明学大（各3）、東京農工大、東大、お茶の水女大、電通大、順天堂大、上智大、成蹊大、東経大、東京薬科大、法政大、早大（各2）、筑波大、東外大、東工大、名古屋大、学習院大、共立女大、聖心女大、専修大、津田塾大、東京農大、日大、武蔵工大、立大（各1）合計28校
文部省（2）、労働省、人事院、日本青少年研究所、鉄道機器㈱、毎日新聞社、朝日新聞社、読売新聞社（各1）
（注・発題者、世話人を含む）



“職際的”な話し合い

×　×　×

昨年9月、「学歴と職業」をテーマに開催した前回の懇談会は、『指定校制』が大学間の格差を基にしたピラミッド型の高等教育システムと、企業の経済合理的な行動様式とが結びついて生まれてきたものであることを明らかにしたが、今回は、受験戦争を過熱化させ教育を荒廃させている学歴社会を取り上げ、高等教育はどうあるべきか、大学人は何をなすべきかについて議論を重ねた。

発題者には、別記のように各界からの参加を仰ぎ、それぞれの立場からの実情報告と分析、将来への展望などが提示された。

主な発言を拾ってみると、吉田氏は、産業界とくに中小企業にとって必要な人材の確保は死活問題であり、潜在能力を期待して採用した従来の水増し雇用は低成長下にはもはや不可能であるとして、労働市場は職業を中心に形成されることになろうと述べ、産業界と教育界の交流を深めつつ、事実判断や対応力を科学的に追究し、ケーススタディを促進する大学院の必要性を力説した。

潮木氏は、学職分離型や実力主義指向型と区別して、組織によって作られる能力を経歴主義と呼び、高度な官僚機構に見られるような実力と能力が労働の場面で作られていくメカニズムに注目する必要性を指摘した。

田淵氏は、労働省の推定している昭和60年の大学、短大卒53万人（50年33万人）からは、大卒者のブルーカラー化は当然の成り行きとして、親や教師による進学に先立つ自己の適性、能力への指導の必要性を強調し、賃金構造基本調査から見た初任給で高卒の上位¼と大卒の下位¼が重なっている事実や東京都の職業訓練校で20％が大卒で占められている事実などから、大卒は必ずしも教育投資の面で効率がよいとはいえない点を指摘した。

司馬氏からは、この3月に初めて卒業生を出した筑波大学の地域研究科の実情報告がなされ、日本的なプロフェッショナル・スクールのあり方として、①分析能力、問題形成能力を教育する、②異質なもの（年齢、職業など）の触れ合いの中で、ある種のバランス能力を持たせ、一つの考え方に固まらない能力を教育する、の二点が結論として導き出された。

永井氏は、一九六〇年代は所得倍増計画、産業優先政策によって、文部行政を人為的に無策にさせたと前置きし、そのシワ寄せが私学に現われ国公立との著しい格差が生じたこと、国立大のうち東大、京大の二校に予算の16％が配分される不均衡から生じるエリート校の出現、それに伴う受験戦争の激化、これらはすべて人為的に作られたものであるから人為的に直すことが出来ると述べ、改革への動きとして、①大学入試制度、②私学助成、③専修学校制度の三点を指摘し、高等教育が相互に強迫される状況が生まれることが好ましいと結んだ。

加藤氏は、「学校教育法の一部改正」というかたちで誕生した専修学校について、特に高等教育との関連で問題となる〝専門学校〟と呼ばれる専修学校が、将来、短大に匹敵する教育機関に成長することを評価しながらも、制約の多いハードな学校になるに伴い、本来、学校教育が捨てて顧みなかった社会に役立つ技術、技能を身につけさせる教育機関としての生命ないしバイタリティが失われることになるのではないかと述べた。

二日目は、前日の発題を踏まえ、①能力と学力、人物評価、②大学の教養と社会のneeds、③専修学校と大学、④官僚組織と能力の四点にしぼって全体の討論が活発に繰り広げられた。

今回は三十数社に及ぶ各業界を代表する企業に参加を呼びかけたが、参加者が全くなかったことは大変残念であった。大学と社会との相互の交流が叫ばれている中で、建前のみが空廻りしている現実を痛感することとなったが、一方では、懇談会の模様が7月8日の朝日新聞夕刊「今日の問題」で『職際的な研究』と題して取り上げられ、官庁や企業の責任者、ジャーナリスト、民間研究所長が大学の学者と共に報告を行なった意義が高く評価されている。

第92回大学共同セミナー

主題――日本にとって国連とは何か

――高野雄一先生の退官を記念して――

期日――昭和52年6月24～26日

〈全体講義〉

国連の研究―私にとっての国連―

前東京大学教授・上智大学教授　高野雄一氏

〈ゲスト講演〉

国際連合システム論―国際連合の本質と現実―

前国連大使　斎藤鎮男氏

〈セクション演習〉

A　社会主義諸国と国連

東京大学教授　内田久司氏

B　国連海洋法会議の動向と日本の将来

龍谷大学教授　高林秀雄氏

C　国連と軍縮問題

元国際原子力機関法律部長　大塚博比古氏

D　国連における庇護権の系譜―最近の国連の領土的庇護会議とベトナム難民の保護をめぐって

東京外国語大教授　斎藤恵彦氏（運営委員）

E　新興諸国と国連―新経済秩序の問題点―

国際基督教大準教授　横田洋三氏（運営委員）

〈参加学生〉　113名（内女子38名）

慶大(19)、早大(15)、東大(13)、東外大(9)、津田塾大(7)、横浜市大、東女大(各6)、一橋大、ICU、成蹊大、中大(各4)、独協大(3)、お茶の水女大、埼玉大、上智大、龍谷大(各2)、筑波大、青学大、聖心女大、成城大、東洋大、日大、武蔵大、明学大、立大、同志社女大、埼玉大経済短大(各1)、合計27校

◇

今回のセミナーは、過去三回、〝国連セミナー〟と銘打って開催された一連の企画を引き継ぐもので、斎藤恵彦東京外大教授の積極的な申し出が契機となって具体化した。併せて、二回にわたり国連セミナーを指導され、また千人会員として当法人を支援しておられる高野雄一先生が、この3月で東大教授を退官されたことを記念し、閉鎖的な日本の大学を開くために大学人は何をなすべきかを、身をもって示された先生に感謝の気持を表わして企画されたものである。

このため、わが国の国際組織法の第一人者であられる高野先生の研究に即して、テーマを「日本にとって国連とは何か」と設定した。運営委員に、高野先生の教え子であり、世界銀行の法律顧問をされてこのほど帰国した横田洋三ICU準教授が加わられることによって、現在の国連を多角的にアプローチするにふさわしい第一級の講師をお迎えすることができた。

学生の反響は極めて大きく、応募者が一二五名を数えたため、近い将来に再度、国連セミナーを開催することを約し、一年生全員の参加を断わることとなったが、国際化時代と言われる状況を反映して興味深かった。

プログラムは、高野先生の全体講義で開始された。先生は個人的な経験からときおこされて、国連の歴史、国連をめぐる諸問題を平易な言葉で諄々と語りかけられ、あとにつづくセクション演習への導入部とされた。

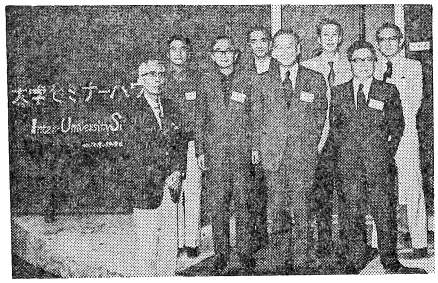
二日目の午後には、昭和48年から51年まで国連大使を務められた斎藤鎮男氏をゲストに迎え、国連外交を第一線で推し進められた体験に基づく研究の成果を語っていただいた。人類が新しい平和機構としてすべての夢を託した国際連合が、幾つかの欠点をはらみつつも国際環境の変化により質的に変ぼうしてきた過程、国際連合システムと、国際システムとの相違、現在の国連の特徴と欠点を分析された。そして国連の役割として、①国際紛争や南北問題を解決はしないが、それらを凍結する、②国際的な種々の問題を提起し、それらを整理する、③二国間外交を補完する、と指摘され、最後に世界国家に言及された。

世界国家は、今の国連の延長線上にあるわけでは決してないが、国連の機能が世界的な規模で発揮されていく過程で、世界国家への準備が行われている、と述べ、何らかの契機で世界国家が出来たときに提出できるブルー・プリントを人類は用意しなければならない。神がこの契機を準備していると見るべきであり、その契機は必ずやってくる、と結ばれ、出席者一同に深い感銘を与えた。

今回のセミナーの特色の一つは、実際に国連の機関で仕事をされた先生方によってシンポジウムが持たれ、将来、何らかのかたちで国際機関に働きたい、あるいは研究の対象としたいという学生達の質問に答えられ、政策決定のプロセス、国連職員としての資質などが多くの事例を通して語られたことである。

三日間にわたって繰り広げられたこのセミナーは、閉会に際して高野先生が言われたように、あたかも〝ミニ国連総会〟の観があった。大学も専攻も異なるそれぞれの個性を持った学生達が、国際的視野を育て、交流を促進して活躍する未来が間近かであることを改めて感じることができたセミナーであった。

セミナーに当たって、国連広報センターより多くの資料の提供があったことを記しておきたい。



前列右より内田，斎藤(鎮)，高野，飯田，後列，斎藤(恵)，高林，大塚，横田の諸氏

第92回大学共同セミナーに参加して

前国際原子力機関法律部長・防衛庁参事官　大塚博比古

今年の春先き、日頃よりご指導を賜っている高野雄一先生から、「日本にとって国連とは何か」というテーマのセミナーに参加しないかとのお話がありました。

正直にいって、各セクション担当の他の諸先生と異なり、私にとっての「国連」とは学問的な対象ではなく、決議案の票読みや、「現地(ニューヨーク)時間午前10時、委員会開催までに必着」といった条件付きで来る請訓電報に対し、関係省庁の意見などを取りまとめて外務大臣の名前で訓令するといった実務の場にほかなりませんでした。

それでも、諸先生からの激励のお言葉もあり、外務省から防衛庁に出向したことを機会に自分自身の乏しい経験をまとめ、学生諸君と机を並べて勉強させて頂くのも悪くないと観念して、セミナー・

ハウスの門をくぐったのです。

着いてみると、東京の近郊にもこんなところがあったのかと思うほどの環境に先ず感心しました。

更に、大学紛争以来、現代の大学が何か別世界のように思われ、学生諸君が一体何を考えているのかが判らなくなってきた私は、日本国中の大学から集った百名余の学生諸君が、整然と寝食を共にしつつ共通の話題に取り組み、夜更けまで真剣に議論を交し、集会となるとギターを弾き、フォークを歌う明るい姿を眼のさめるような思いで見つめるばかりでした。

私は「国連と軍縮」というテーマを担当させて頂きましたが、私自身の背景や体験から、どうしても、現代のいわゆる「軍縮」が、観念的なきれいごとではすまされず、米ソの戦略兵器制限交渉のように虚々実々の「形を変えた戦争」といった側面に触れざるを得ませんでした。

私のセクションの中には女子学生もかなり居られたので、大量報復戦略とか核弾頭だとかの「きなくさい」話をするのが何となく申訳ないと思いましたが、そんな風に考えるのは却って失礼であると或る学生からおたしなみを受け、成程男女平等だなと感じつつ、すこぶる爽快な気持になりました。

僅か三日の経験ではありましたが、セミナーを通じ、一番教えられたのは私です。私の拙い講義にもかかわらず、その後学生諸君からお便りを頂いたり、7月の半ばにはコンパまで開いて頂いて本当に感謝しています。

こういう方々が、将来それぞれの分野で活躍される一方、国連を理解し、国際関係、安全保障問題に関心を持ちつづけられることを期待し、且つ、このような機会を私に与えて頂いた飯田先生、高野先生をはじめとする諸先生の御厚意に感謝するとともに、職員の皆様の献身的な御努力に敬意を表します。

第92回共同セミナーに参加して

Cセクション　小川水尾

啓蒙されつつあるという歓びに充ちた48時間だった。知らないということが、痛みでなく、未熟であることが、苛立ちでないことを実感した豊潤な48時間だった。芽であることは可能性そのものと信じたいし、今回のゼミは、発育への触媒としては画期的なものだ。

Power Politics の横行する国際社会を、国家的エゴイズムむき出しの欲望の修羅場として俯瞰する時、国際関係論は、『人間学』――humanity――の延長にあるといえる。個人の集合体たる国家群が、如何なる『個性』を発揮し、如何にふるまうか、どのような行動習性を見せるか観照することは、人間を識ろうとする努力にも似ている。人間を、人文科学の視点からだけでなく、社会科学の眼で眺められる機会を持ちつつある自らを倖せだと想う。日本にとっての国連、人類にとっての国連と謂う遠大なテーマに取り組むに、二日は余りに短かかったが、あれだけ密に充実した48時間は、そう持てるものではないと思う。

これという speciality を持たず、気まぐれにまかせての dilettante でしかない私にとって、諸先生方、大使の在り様を近くに直視し、一筋の道をひたむきに進んでいることの美しさ、強さを思わずにはいられなかった。Participants たる学生の側の反応も、鋭い問題意識に充ちており、大いに啓発された。共に語るに相応しい佳き仲間に恵まれたと思う。

Allied Power の戦後処理機関として発足した国連ではあるが、global な平和実現にとって、残された最後の砦になった観がある。人類がここで一歩前進するとしたら、それは国連を通しての『偉大な一歩』である公算が大きいし、その一歩は、私達の世代の力に拠るものであるに違いない。一歩の恩恵に浴すだけの subjects, parochials たるより、Participants として、全人類的な前進活動に、積極的に関りたいと願う。

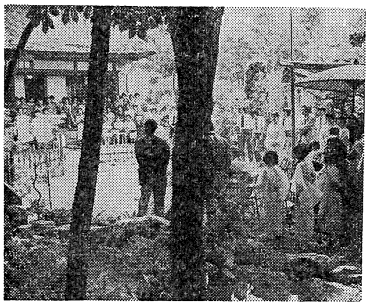
（東京外国語大学卒）

●遠来荘に松月池の記念碑を

鮎川宗藤先生の喜寿を祝う茶会において

7月31日、表千家の茶人、千人会員鮎川宗藤先生の喜寿を祝い茶会が遠来荘で行われた。

真夏の陽をさけるため、よしずが張られ、その中で、一橋大学茶道部の学生が立礼の点前を行っている。参会者の予定は一〇〇名位だろうと予定されていたが、次から次と先生の喜寿を祝う人がマイクロバスから降りて来る。その数約二〇〇名、老婦人あり、美しく着飾った若い娘あり、お子さん連れの母親あり、中には遠く京都から大徳寺寿光院の住職中村老夫人もお見えになった。



記念碑の除幕式（手前は松月池）

館長は挨拶の中で、「老人になることによって人生は完成する」と云われたが、まさに鮎川先生の今のこの姿を見ての実感だろう。そしてそれは又、若い人々に対する現実を美しく生きるための尊い教訓でもあろう。

茶会は屋内の茶室で、抹茶と煎茶の席が設けられ、流れるように行われている。真夏の陽の光は、ちょっと体を動かすだけでも汗ばむようだが、茶室の中は、涼気がみなぎり、静寂そのものであった。

本日の茶会の最も印象的であったものは、何と言っても、碑の除幕式である。遠来荘の庭の一隅につくった小さい池を松月池と命名し、鮎川先生の句を石にきざみ、記念碑とし先生のおひ孫さんによって幕が引かれた。多くの参会者の拍手がこれにつづいた。先生の物静かな姿は、かすかにゆれ、万感胸を打ち、感激の涙が、恐らく胸中にあふれ出ようとしていたのではなかろうか。

碑は小さく、池のほとりにたたずんではいるが、いつかは、池と共に周囲の自然ととけ合って、遠来荘の風趣を更に深めることであろう。碑文は左記の通り。

道
かずかずの　うつわの
茶の香は　一つなり

宗　藤

×　×　×

先生のご指導をうけたお弟子さんたち、一橋大茶道部の学生たちの心からの奉仕は心温まるものがあった。今回の喜寿茶会がよい先鞭をつけられたから、今後も、遠来荘を用いて、この種の茶会がひんぱんに開催されるであろう。

●事業部だより

特色ある大グループの利用が目立つ

①常連のオリエンテーション――お茶の水女子大と東京学芸大
②恒例の学会・会議――日米学生会議、核融合理論研究集会
③新規の大学事務研修会――日本私立医科大学病院医療事務研究会

6・7月の利用状況

●まず6・7両月の状況を数字で示すと、前者がグループ数五三、宿泊延人数三、二八八人（定員比五一%）、後者がグループ数一一一、宿泊延人数四、二五七人（定員比五七%）となる。

●4・5月に引き続き、6月そして7月前半まで、いわゆる新入生オリエンテーションあるいは新入生セミナーがこの丘に青春の活気を加えた。お茶の水女子大（二回計四二五名）、東京学芸大（二〇〇名）、白梅学園短大（二回計四四〇名）、職業訓練大（二四三名）は、いずれも全館を借り切って恒例の研修を実施し、よい成果を上げたと喜び、そのほとんどが来年の同じ時期に申込みをされた。

●各大学個別のゼミ・グループに混って、大学連合の学会や研究集会がいくつか開催されているが、セミナー・ハウスにふさわしい利用の姿というべきであろう。

6月中旬の日本私立医科大学病院医療事務研究会（私立医科大学協会主催）には、全国二七の私立医大から約一〇〇名が参加している。加盟各大学が調査研究の成果を分かち、情報を交換することによって医療事務の改善を図ろうとするこの研究会は、これまでも年二回東京都内で、しかし一日限りの日程で行って来たという。今回はじめて当ハウスでの開催を試みたが、宿泊を兼ねることによって研究・討論の効率を高め、加えて人間関係を深めることが出来、参加者から大好評を得た、と幹事役を努められた東京医科大学病院の斉藤明氏は喜ばれた。

同じ6月中旬、6日間にわたって開催された第4回核融合理論研究集会にも、全国各地の大学、原子力研究所等の研究者約七〇名が参集、最新の研究の成果を発表し、討論しながら、今後の研究の方向や問題点をさぐった。なお、〝頭脳流出〟で知られるプリンストン大・吉川庄一教授も米国から参加している。この一流理論物理学者の熱心な研究の合間に、飯田館長はお茶の席を設けて接待、これには川喜田理事長も加わって、参加者と歓談のひとときを過ごした。

昨年に引き続いて7月に当ハウスで開催された第2回移動大学八王子ゼミナール（今回の副題は「生活の創造――競争原理を超えるもの――」）も、数多くの大学の学生の参加を得て、極めて〝学際的〟かつ〝職際的〟な集会であった。

日本ワイルド協会主催の第2回ワイルド・セミナー「童話をめぐって」（参加者約七〇名）も、大学共同の集会であり、7月2日夜講堂で行われたオスカー・ワイルドの映画の夕べ（「しあわせの王子」、「サロメ」を上映）には、幹事役の荒井良雄学習院大教授のご好意で、当夜在泊の他の利用グループも無料招待にあずかった。これまた大学共同の広場にふさわしい光景といわねばならない。

●この丘のinter-universityが描く模様に、も一つinter-nationalな色彩が豊かに織り込まれるのは、夏も7月後半からのことである。夏休みを利用した国際会議が当ハウスで開かれるからである。7月25日より一〇日間、当ハウスでは五回目の開催となる第29回日米学生会議が開催された。その参加者は、日本人は全国三〇大学からの五一名、アメリカ人もアラスカ、ハワイ両州を含む全米二五大学の三四名、計八五名。学生の自由な立場で日米間の相互理解を深めんとする、文字通り大学を超え、民族・国家を超えて交流する若者のコミュニティが、ここに現出したのである。しかも、一糸乱れぬ集団生活のマナーや、見知らぬ人とも積極的に交わりを深めようとする姿勢は、よき模範たりうるものであった。

●6・7月には、四回にわたり会員校の教職員の集会を歓迎することができた。慶大工学部の職員研修、そして千葉商科大の事務職員研修が二回、いずれも二泊三日で開催されている。また、東京農工大農学部・川村亮教授を中心とする各地の農大の教授たち九名は、一泊で「施設見学とセミナー・ハウスについてのゼミ」を行い、将来の利用のための研究をし、飯田館長もその懇談に加わった。

●協力会員校として新加入の杉野女子大最初の利用は、すでに当ハウスの常連のお一人、また、今回の会員校加入に努力された田村皖司先生ご指導の教育原理ゼミ二二名で、7月23～30日の長期にわたって滞在、当ハウスと杉野女子大の関係を一層深めて下さった。

交歓会寸描

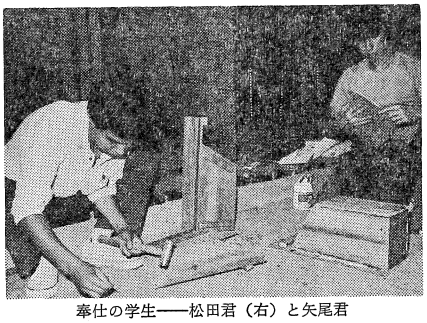
6月25日＝夕食交歓会に第92回共同セミナーを含む八グループ（二九大学）二二〇名が参加。高野雄一上智大教授が今回の共同セミナーの紹介を兼ねてスピーチ。参加学生のギター演奏や全員の合唱など。

7月5日＝第14回教員懇談会を含む一六四名が夕食時に交歓。同懇談会に発題者として参加の前文部大臣永井道雄氏がユーモアに満ちたスピーチ。若人の合唱など。なお、当夜、淑徳大・社会福祉学科のゼミ参加者が、食堂入口に七夕の飾りつけをした。

――野鳥の巣箱作り――

7月3日、夏の太陽の照りつける日曜日に、九大学一一名の男女学生が集まり、野鳥の巣箱作りを行った。作業を呼びかけたのは第91回大学共同セミナーに参加した松田圭弘君（東工大三年）。野鳥の生態観測を趣味とする同君は、キャンパスに生息する鳥の種類が極めて少ないことに気づいた。一二年間、多くの方々に植えていただいた記念樹も木蔭をやどすまでに育ったが、若木であるために鳥が巣を作るほどの穴や幹がないためという。

巣箱を利用する鳥はスズメ、シジュウカラ、ヒガラ、ムクドリ、コグラ、ブッポウソウ、オンドリ、アオバズク、キビタキ、ジョウビタキなどであるが、巣箱の穴の大



奉仕の学生――松田君（右）と矢尾君

●館長日記から

私は、いま50号に至るまでの十三年間の歩みを回顧している。50号を迎えることは記念すべきこと、感謝すべきことである。そして何事も善意に解することのできる大学人の理解と協力の中で、独立独歩というのでなく、共立共歩、大学を開くという必然の途を歩んだ記録を書きつづけたことに歓喜している。◆格別に記念号として特集することはしなかったが、最適任と思われる御二人にご執筆をお願いして50号を迎える意義と記憶にとどめたい事などをお書きいただいた。十三年共に歩んで下さった山内恭彦先生からは、間違いのない軌跡の証明をしていただいた。思案する学者の正しいご感想に傾聴したい。また生れ出ずる悩みを知っておられる梅醇氏の創刊当時における回想には誕生しようとする生命の心音がきこえるといってはほめすぎであろうか。二つの文章から、編集は新たな指針を学ぶであろう。◆私は快事に驚喜することしばしばである。私はこのような感動の中で生き、かつ年老いることのできる幸福を敬老の日を間近かにしてしみじみと感謝している。◆8月5日、私を受取人に指名した三〇〇万円の生命保険証書をいただいた。いまはK・S氏としておくことにする。アメリカではよくきく話であるが、私にとっては、最初に受けた経験である。このような寄付の仕方が広く社会的慣習となったとき、教育事業は健全に維持経営される。税金による国の補助金も必要であるが、社会性のある個人の寄付はさらに重要である。そこには純真な人間、熱のある人間、優しい人間、親切な人間、善意の人間が実在して、事業に心が交流するからである。◆9月の10日に三二通、11日には二八通の千人会費のお礼を書いた。その中に小学校助教諭Y氏のA会費、S氏が紹介してくれた五人の会員の領収書五通などを前にしては、しばしペンを止めて頭をたれるという次第である。◆すばらしい利用者とは、学生と共に年に二回か三回、ゼミをなさると共に、千人会員であられる教授のことをいう。いまここに多数の教授の氏名を挙げることはできないが、9月9日から12日まで定年記念のゼミのため学生と在泊された法政大学安井郁教授を見本として紹介したい。先生は最近古稀を祝って歌集「永劫の断片」を刊行されたが、その中に当ハウスでよまれた数首がのっている。そのご縁の深さを示すのが次の一首である。

冬枯れのセミナー・ハウスに
若きらと籠りて探る生と死の意味

きさによって鳥の種類が決まってくる。今回はシジュウカラやスズメを対象とした直径2・8cmと、ムクドリなどを対象とした5cmの二種類の箱を作った。

慣れぬ手つきでノコギリやカナヅチと格闘したが、館長から差し入れの西瓜が届けられると作業のペースも早くなり、合計一一個半を作り上げた。

巣箱を取りつける時期は晩秋がよいので、それまでに少しずつ数を増やし、運動の輪を広げていこうと話し合い、第一回の作業を終了した。

なお、今までに四、八〇〇円のカンパが寄せられている。

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

6月＝三、二八八人
7月＝四、二五七人

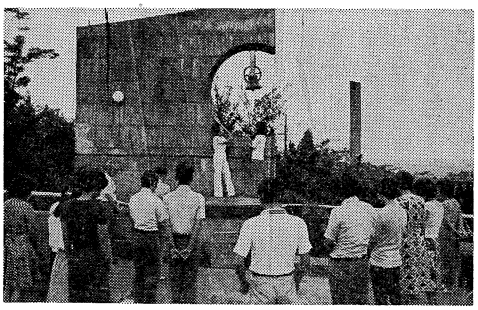
■6月

東京大学生産技術研究所講師　虫明　功臣
東京都立大学教授　金子ハルオ
東京都立大学助教授　前田　雅英
横浜国立大学教授　久保村隆祐
東京大学公衆衛生教室
東京工業大学教授　松田　武彦
東京大学助教授　梅沢　豊
上智大学教授　吉田　裕
立教大学教授　三戸　公
学習院大学教授　児玉　久雄
中央大学教授　川口　弘
明治大学法律研究グループ
東京薬科大学教授　志田　信男
法政大学講師　横田　澄司
東京学芸大学教育学部(理科教育)
新入生合宿研修
神奈川大学助教授　堀野　定雄
早稲田大学教授　松田　正一
学習院大学教授　大川　章哉
東京女子大学写真部春期合宿
神奈川大学教授　鈴木　隆
東京大学教授　山内　太郎
駒沢大学講師　石井　修二
津田塾大学教授　藤村　瞬一
東京外国語大学教授　竹内与之助
東京学芸大学助教授　小町谷照彦
東京大学助教授　西田　美昭
成蹊大学教授　三沢　一
千葉商科大学事務局職員研修会
千葉商科大学教授　小竹　豊治
白百合女子大学教授　高橋　康子
白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション＊
職業訓練大学校新入生セミナー
日本女子大学付属高等学校
高校生活研究セミナー
第92回大学共同セミナー
第5回八大学合同セミナー
私立医科大学協会医療事務研究会
第4回核融合理論研究集会
新生活運動協会
東京都立保育園園長会
京都府文化事業室
商英セミナー研修会
自衛隊中央病院婦長研修
土浦フレンド教会
日本教会成長研究委員会
伊勢丹プチモンド＊
京王プラザホテル
日本化薬

【個人利用】
東京薬科大学教授＊　河野　恵
お茶の水女子大学助教授　井内　昇

■7月

中央大学助教授　石崎　忠司
千葉商科大学教授　清水　昌三
学習院大学教授　玉野井昌夫
東京都立大学教授　二村　敏子
中央大学教授　沼　正也
法政大学教授　村上　直
東京学芸大学助教授　久場　嬉子
法政大学教授　鈴木　徹三
明治学院大学教授　増田　茂樹
千葉商科大学事務局職員研修会
東京都立大学教授　古屋野正伍
法政大学教授　金山　行孝
法政大学教授　湯川　和夫
千葉商科大学教授　野村　隆夫
横浜国立大学講師　藤田　忠


平和への朝の祈り——広島原爆記念日に

国際基督教大学国際問題研究会
一橋大学教授　竹内　啓一
国際基督教大学教授　原　喜美
学習院大学講師　平井　規之
学習院大学教授　小松　茂夫
法政大学講師　小林　弥六
東京工業大学助教授　野田　淳彦
早稲田大学教授　大頭　仁
東京大学教授　肥田野　直
東京都立大学助教授　伊藤　直明
法政大学教授　豊田　武
津田塾大学教授　矢沢修次郎
学習院大学教授　斎賀　久敬
東京大学助教授　菊池　昌典
お茶の水女子大新入生セミナー＊
東京経済大学教授　箸方　幹逸
芝浦工業大学助教授　三井所清典
慶応義塾大学教授　加藤　寛
東京農工大学教授　川村　亮
慶応義塾大学教授　小野山卓爾
鶴見大学教授　土屋　順子
駒沢大学聖書研究会
東京大学教授　城塚　登
東京大学助教授＊＊　虫明　功臣
東京大学教授　小林　直樹
東京都立大学助教授　堀川　浩甫
日本女子大学研究室スタッフ会議
千葉商科大学講師　西村　文孝
駒沢大学助教授　小林　英夫
工学院大学教授　川元　修二
東京都立大学助教授　石田　頼房
鶴見大学教授　井村　君江
東京都立大学教授　瀬戸　恒夫
中央大学教授　山下　幸夫
中央大学教授　外間　寛
大妻女子大学教授　隈部　直光
成蹊大学教授　久保田キヌ
電気通信大学助教授　野下　浩平
法政大学教授　横山　勝信
東京大学助教授　和田　英一
上智大学教授　平井　久
国際基督教大学教授　都留　春夫
立教大学教授　野々口格三
中央大学教授　今宮　謙二
東京理科大学教授　伊丹　邦夫
中央大学講師　青木　一芳
東京学芸大学教授　古谷　庫造
東京都立大学助教授　田辺　良美
東京大学助教授　岡村　甫
共立女子大学助教授　入江　和生
東京学芸大学講師　岡崎　恵視
明治大学マーケティング研究会
慶応義塾大学職員研修会
成蹊大学レザルクスキークラブ
杉野女子大学教授　田村　皖司
武蔵工業大学教授　益子　正己
産業能率短期大学講師
柴田　文麿
淑徳大学講師＊　田中　一彦
第14回大学教員懇談会
東京芸術大学助教授　船山　隆
女子美術大学教授　郡山　正
都立工科短期大学教授
奥野　一夫
横浜市立大学教授　柳下　勇
独協大学教授　林　俊一
多摩美術大学助教授　奥　二郎
移動大学八王子ゼミナールプロジェクト講師　米山喜久治
矢内　宗紫
相模女子大学講師
立正大学演劇部
日本ワイルド協会
情報科学若手の会
科研費古坂班・日本農薬学会セミナー
文部省（財）日本余暇文化振興会
八王子復活教会
GKデザイン研究所
茶道研修会
日本キリスト教団国立教会
立川高等看護学院
早稲田速記学校
松月会
協同乳業
京王プラザホテル＊
バローズ
太田製薬
稲城市小中学校教務主任会
日本化薬

【個人利用】

伊東国際特許事務所　松浦　兼行
日本大学学生＊＊　江藤　隆信
日本大学学生＊＊　七條　充弦
練馬区立大泉第六小学校
道本　陽子
道本　幸仲
司法修習生

■編集後記

創刊50号に至る歩みは、そのまま当ハウスの成長のあかしである。この足取りを温く、そして厳しく見つめていて下さる山内恭彦先生に、ハウスを支えて下さっている多くの方々を代表して、巻頭言をお寄せいただいた。

また、本紙が生まれ出たいきさつを中央公論事業出版の梅醇氏が綴って下さった。当初は梅氏の担当であったが、その後、水谷敦雄氏が交替し、ここ数年、編集子とコンビを組んで誠心誠意取り組んで下さっている。あるいは職員以上に両氏はハウスの歴史や事情に明かるいと言えるかもしれない。

本紙の編集にはこのような蔭の力があることを記して、日頃のご協力に感謝したい。（能）

JAPAN and its Nature
日本の自然
監修　湊　正雄（北大教授）
編集　地学団体研究会
B5変形　224頁オールカラー
4,800円

流氷の北辺から、サンゴ礁の沖縄に至る日本の自然を縦糸に、日本列島とその上に住む生物の移り変わりを横糸にした、壮大なドラマに学ぶこの本は、私たちに自分の国の自然を、美と科学の両側面から再認識させてくれる。地学団体研究会の中堅の人々を中心に、地学・生物・考古学者が加わった研究者グループの労作で、日本列島の自然解説書の決定版。

教育のあしおと
900円
中内敏夫・竹内常一　共著
藤岡貞彦・中野光

教育の荒廃が叫ばれ、改革が求められる今日の教育問題解決に、新しい展望を開く期待をこめて、30年を越えた教育の戦後史を、戦前・戦後の教育関係根本資料の検討、関係者からの聞き取り、問題地域の直接取材など教育を実践した側の足跡を明らかにしつつ、4人の共同で描いた好著。

平凡社
東京都千代田区四番町4－1